

平成16年9月の解説（府県天気予報）

【9月の天候状況】

上旬と下旬は前線や台風の影響で全国的に曇りや雨の日が多くなりましたが、中旬は高気圧に覆われて晴れた所が多く、旬平均気温は東日本と西日本を中心に平年より高くなりました。

7日には、台風第18号が長崎県へ上陸し、日本海を北上しました。西日本や南西諸島を中心に大雨となり、全国各地で記録的な暴風が吹きました。瀬戸内海沿岸と西日本から北日本にかけての日本海沿岸などでは高潮も発生しました。

29日には、台風第21号が鹿児島県に上陸して本州を縦断したため、広い範囲で大雨や暴風となりました。台風の接近前から本州付近にあった前線の活動が強まり、宮川村（三重県）や西条市（愛媛県）などで土砂災害が発生しました。

【9月の検証結果】

17時発表予報の「降水の有無」の適中率は、台風と前線の影響で西日本では例年（注）より10ポイント以上低くなりました。北日本と北陸地方は例年よりそれぞれ6ポイントと4ポイント高くなりましたが、全国平均の適中率では、明日予報・明後日予報とも例年よりそれぞれ3ポイントと5ポイント低くなり、78%と72%でした。

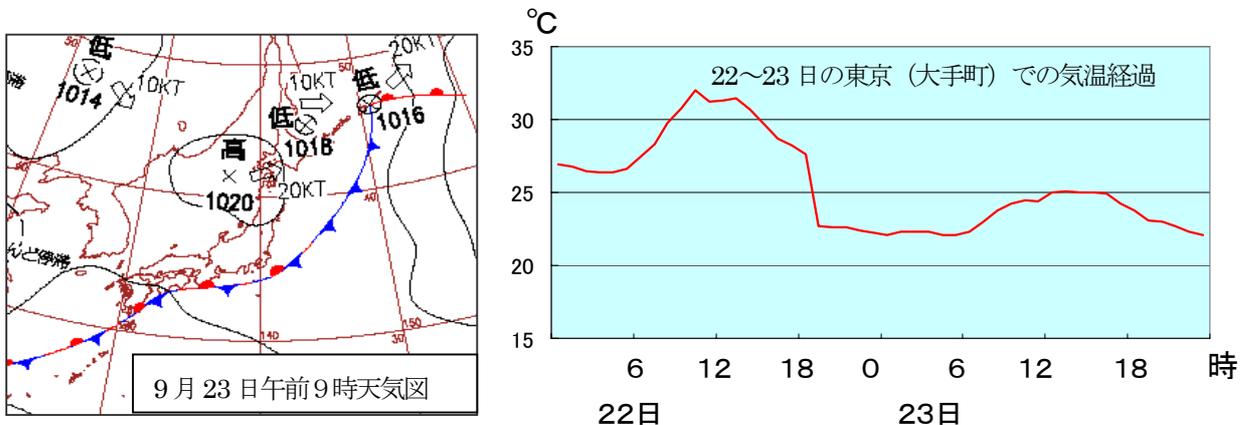
最高気温の予報誤差（RMSE）は、全国平均では例年より0.1℃大きい2.0℃でしたが、月間日照時間が平年より少ない西日本では例年並より0.3℃以上大きくなりました。予報の系統的な気温誤差（ME:平均誤差）は全国平均で0.2℃の正偏差（高温バイアス）となり、日照時間が平年の2/3と少なかった中国地方では0.6℃の正偏差でした。

最低気温の予報誤差は、全国的にはほぼ例年並の所が多く、全国平均も例年並の1.3℃でした。

（注）例年値は気象庁HP（評価）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【9月の天気予報から】——前線の南北の気温の急変（23日の東京の天気予報から）——

9月になると、日本付近を覆っていた高温で湿った太平洋高気圧の中心が本州の南海上に移動して、北側の寒冷で乾いた大陸の高気圧との間で「秋雨（あきさめ）前線」が形成されます。前線の南と北では、天気と最高気温が大きく異なります。

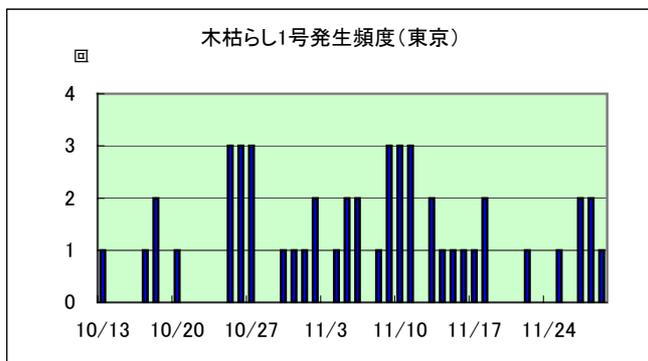


22日に秋雨前線の南側に位置した東京は、最高気温が32.9℃で真夏日になりました。22日17時発表の東京地方の天気予報では、秋雨前線の南下は遅いものと判断し、翌23日を「曇りで日が

射す、所により一時雨、最高気温は30℃」としました。しかし、前線の動きは予想より早まり、23日朝には日本の南海上まで南下していました。このため、東京は前線北側の冷たい空気に覆われ、昼前後に合計0.8時間の日照がありましたが概ね曇りで、日中の最高気温も25.4℃までしか上がりませんでした。

【11月の天気予報の利用にあたって】

11月は、日本付近を低気圧と高気圧が交互に通過しながら徐々に晩秋から初冬に向かう、秋と冬が同居する季節です。低気圧の通過後は移動性高気圧に覆われて、「小春日和（こはるびより）」といわれる暖かく穏やかな天気になります。しかし、低気圧が日本付近を通過する際に急速に発達して、全国的に荒れた天気になることがあります。また、低気圧の通過後は冬型の気圧配置となって季節風の「木枯らし（こがらし）」も吹きますので、特に山や海に出かける際は、天気予報や警報・注意報等の気象情報の確認をお願いします。



東京の「木枯らし1号」は、10月中頃～11月末に冬型気圧配置で吹く 8m/s 以上の最初の強風（風向は西北西～北）。1951～2003年の53年間で観測されなかったのは4回だけ。